

上田高等学校同窓会
中南信支部会報

二十一世紀の始めに

中南信支部長 小林茂昭 (五四期)



上田高等学校中南信支部の会報第二報が発刊される運びとなったことに、幹事会の皆様、ご協力いただいた会員の方々に感謝いたします。

二十世紀は戦争の世紀であった。二十一世紀は心豊かな平和の世紀を願っていたが半年余りで世界を震撼させる事件が起きた。九月十一日にアメリカに発生した同時多発テロである。

その直後にオーストラリアの学会に行った。特に厳しい保安チェックは感じられなかったが、チェック

クインは出発時間の三時間前にするようにいわれた。九月末に学会で渡米した。サンフランシスコ空港での入国手続き、通関は、いつもより緊張感があり、胸にバッジの警官の数が多く、X線の再チェックがあった。また、国内線でもパスポート等の提示を要求され、さらに口頭で名前を確認。携帯パソコンは特に詳しくチェックされた。「手荷物を身から離さないように、他人から品物を受け取らないように」、また「放置手荷物は没収して破壊する」と放送を常に流していた。テレビでは America's New War: America on Alert の文字が流れ、国内世論を統一する努力がなされていた。多くの家には、星条旗が掲げられ、街をゆく

車にも星条旗がはためいていた。日本人として不愉快なのは、「真珠湾攻撃」と「神風特攻隊」が、テロ報道のなかで繰り返して引き合いに出されていたことである。しかし、アメリカという国は、反対意見が必ず出て、それが報道される。ワシントンの反戦集会では、広島、長崎の原爆投下は無差別殺傷ではなかったかと訴えていた。二十一世紀の日本はどのような方向に向かっているか。半世紀近く前に上田高校に入学生し、幾多の情熱ある先生から教えを受け、自分の将来の夢を膨らませたことを想起して、まずこの現実を直視し、過去から学び、新たな視点で新世紀の生き方を考えてい。

発行人：小林茂昭
上田高等学校同窓会
中南信支部事務局
連絡先：0263-85-1599
題字
松岡翠風（仁太郎）氏
（39期）南安泰在住
全日展書法会副会長
公募「全日展」特別
選考審査員 他

平成 13 年度 中南信支部総会のご案内

と き

平成 13 年 11 月 11 日（日）
第一部 総会・講演会 午後 2:30～4:00
特別講演
「私とチェルノブイリと小児甲状腺癌」
講演者 菅谷 昭 氏（60期）

と ころ

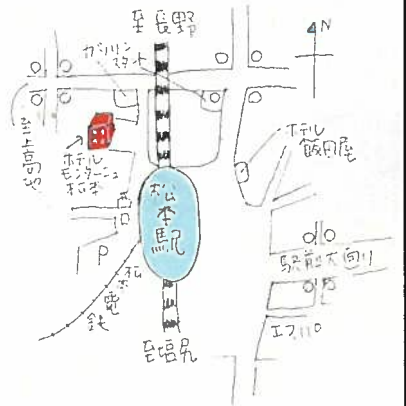
ホテルモンターニュ松本
（旧マウントホテル）
松本市中上 3-2

会 費

8,000 円（通信費含む）

講演者ご紹介（すげのや・あきら）

なお、第一部のみ参加の方は 1,000 円



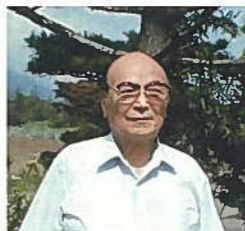
1943年更埴市生まれ。信州大学医学部卒。聖路加病院、トロント大学留学等を経て信大医学部第2外科助教授。91年からチェルノブイリ原発事故の医療支援活動に参加。95年に信大を退官の後、単身ベラルーシの高度汚染地域等にて医療活動を継続。今年6月帰国。11月には田中県知事の招聘で長野県衛生部衛生技官に就任予定。吉川英治文化賞、ベラルーシのフランツィスカ・スコリナ勲章等受賞。著書に「チェルノブイリ診療記」（晶文社）「はくとチェルノブイリのこどもたちの5年間」（ポプラ社）。

第二部 懇親会 午後 4:00～6:00

同封のハガキにご出席の有無、ご近況をお書き添えの上、返信下さい。

思い出近況

思い出の濠



宮澤忠明(四四期)

石塚為雄先生でした。背広の上衣を脱ぐとそのままだけの中へ全身泥だらけになって奮斗されたその姿です。五十数年前の思い出です。

古城の詩

(一) 松尾城下の裏町通り

右へ左へまた右へ
弁天様に手を合せ
時を過ぎてまた戻る
恋の下町曲り道

(二)

古城の堰 堀の水
右へ左へまた右へ
古城の桜 幹のかげ
鼓動のふるえ手の握り
恋の真田の城の跡

(三)

古き廓の格子戸あけて
右へ左へまた右へ
虚空蔵様と唐獅子と
点る明りは街の灯か
恋の太郎の空の月

生涯現役で

谷道(旧姓)山崎(七郎)(五〇期)



五十期卒業生であるが、入学した時の校名は上田松尾であった。新制中学と旧制中学の生徒とが一緒になって生活したが、トラブルもなく高校三年間を楽しく送れた。男子生徒のみという独特の雰囲気からか、個性的な仲間が多く、校内が活気に溢れていたようだ。

私は卓球部に入り、卓球場(剣道場)を住みかのように生活を送っていた。団体選手先輩が毎日のように練習にきていたし、卓球好きという仲間が大勢いて競い合った。遅くまで練習して用務員さんに注意されたこともあった。顧問が指導するわけでないし、上級生が強制するのではない部活動であったが、まさに切磋琢磨し合っていて楽しかった。

中学校の教員になって、卓球部の指導を任せられたが、生徒たちに、自発的な活動をさせ、とにかく卓球の魅力を感じさせることに重きをおいてきた。時々「六文銭の蓄いを立て

遠い昔の「汽車通学」青春事始め

塩川芳朗(五三期)



遠い昔の小さな記憶があります。ある朝、汽車(当時はそう呼んでいました)が滋野と田中の間を走っていた時、デッキに立って後方に走り去る窓の外の木立を見ていた、同じ小諸出身のS・T君の口から出た言葉です。「この木の数を卒業までに覚えてしまおうぜ、きつと」。入学間もない、一九五二(昭和二十七年)四月始めのことでした。

そんなことをする必要がないし、できるはずもありません。S・T君も本気で言ったので冗談だったわけでもなく、おそらく、生活空間の飛躍的な広がりや環境の質的变化への時めき、期待感などがないまぜとなった高揚感を眼前の風景に託して、そんな言い方で表現したのでしよう。こうした高揚感には上田中学開校以来、夢を膨らませて「古城の門」をくぐった、同窓生のだれでもが入学時に共有したものでないでしょうか。

それが感じられて、通常なら聞き流して、すぐ忘れてしまいたいような言葉に、私の気持ちが強く共振したのだと思います。半世紀が過ぎた今でも、覚えているのですから。もつとも、S・T君(当人の記憶については、聞いてありません)が、戦争が終わって七年。そのころの日本では、まだ一般家庭に車などありません。当然、中学生の日常的な行動範囲は歩いて行ける通学区域内、私の場合、せいぜい旧小諸町内に限られていました。「汽車に乗る」ということなど、もう特別な出来事のうちに入っていたものです。

が、ある日から日常的な行動に組み込まれ、「二十キロも離れた」上田に、汽車で通い始めたわけです。狭い世界で育ってきた新入生にとつて、この汽車は単に居住地と学校を結ぶ交通手段でなく、ややおバーに言えば、居住地と新天地との懸け橋でもありました。



十七歳の気力で

小林満奈美(八四期)



偏差値が全ての時代に高校生活を送ってきた私は、勉強イコール大学受験というステレオタイプな環境にヘトヘトでした。全教科を万遍無くこなすことは一点集中型の私に出来るものでなく、輪をかけて野球部よりも休みが無い吹奏楽団に足を、いや全身をドップリ浸っていたので、特に数学の時間は鉛筆を使って連指の練習をする悪い生徒でした。その吹奏楽でも人間社会の辛苦を軍隊的に叩き込まれ、多感な若き日々を、今考えると随分ストイックに過ごして来たような気がします。

こんな私が本当の意味で勉強をする気になったのは、大学の寮で夜遅くまで机に向かう先輩方の姿に接してからです。社会に出て後は、文学仲間と一〇年以上作品批評の小論文を書くグループに属したり、あれほど恐ろしかった数学や物理をやり直して建築士の資格を取る宝くじのような賭けも経験し、その後因縁か怨念か「数学セミナー」を愛読する夫と暮す毎日になりました。のろけさせて頂くなら、彼は固定観念に捕われないうべらんな人で、私が再び本格的に大学で数学を学び続けたいという希望に理解を示してくれたのです。家ではテキストを開き、夏は単身二〇日以上に及ぶ日吉、三田行きをもって、別居生活も恒例となってきました。

途中、ひよんなことからNHK視聴者会議委員に席を置いたり、父親の病いで一日おきに三才山を越えての病院通いをしたりと、本のページをめくれない時期もありましたが、なんとか全国の友人と励まし合って楽しい現役学生を続けています。

自ら学ぶことの楽しさを教えてくれたものといえはもうひとつ、旅を通しての出会いです。宿泊先も交通手段もあらゆることを自らの手でプロデュースし、生活者の中に溶け込むような、気ままなぶらり旅をしているうちに、縁あって五度の訪問をしたスペインとポルトガルには私を娘・姉さんと呼ぶ人々との繋がりが、また、インドには父子二代に渡って付き合っている大學生の「弟」ができました。今では彼らとの手紙、電話、メールやチャットといったコミュニケーションによって、語学がより現実的に必要なものとして私のそばに存在し始めています。



会員短信

(昨年の返信覧等から)

林守 (三九期) 諏訪郡下諏訪町 林医院

老医老人との話し相手が主で、地域の老人をおだてながら何とか頑張っておりま

芹澤弘文 (四一期) 岡谷市

脊椎管狭窄症のため、医療の一線から退いて、ほとんど隠遁塾居に近い生活を送っています。それでも自宅において、肺がん、結核検診のX線フィルム読影などで、少しは世のお役に立っていると思えるのは、せめてものなぐさめです。

岡田英雄 (四二期) 上伊那郡南箕輪

ジェルモ

百周年のゴルフ大会(中軽井沢)に出席してきました。遠いので早く帰って来てしまいました。同年の高橋、中村、大塚君とラウンドし、楽しい一日でした。

保科敦 (四四期) 諏訪市

諏訪中学から父の勤務の関係で上田中学へ転校、日毎に戦争が激しくなると、勉強どころか菅平の開墾、鳴海への動員と、一体何をしに学校へ来ているのかと疑う毎日。落ち着いて学びたかった。中南信に多くの先輩後輩がいるのが嬉しい。

村上道夫 (四八期) 松本市

元気に最近是中国への旅に出歩き、すっかり中国五千年の歴史に魅せられ、すっかりとりつかれ、動けるうちにと楽しんでおります。皆様によりしくお伝え下さい。

深澤昌美 (四九期) 上伊那郡箕輪町

六九歳となりサンデー毎日です。孫とキヤッチボールが夢でした。昨年やっと男の子が生まれ、あと一〇年頑張らねばと期すこの頃です。

藤澤良彦 (五二期) 松本市

松本平第九をうたう会実行委員会の事務を担当、又長野県童謡唱歌をうたう会の会報編集責任者をしていて、普段はタウン情報紙の編集リポーターをしています。

山崎英樹 (五七期) 松本市

上田(山口)の小さなログハウスを拠点に EDUCATION THROUGH ART 研究所・少年美術館の活動を始めています。夢に向かって、すべてステップバイステップです。いろいろなことに感動しながら楽しんでやっています。

掛川幸四郎 (五九回) 諏訪市

浪浪の身で諏訪湖周辺をウロウロしています。

山崎哲 (六一期) 諏訪郡下諏訪町

セイコーエフソン

生産技術本部に異動しました。新人技術屋を二〇名程あずかり「もの作り」の基礎技術習得を担当しています。

鈴木(旧姓田中) きみ子 (六九期)

東筑摩郡朝日村

自分のあのころをなつかしく思い出します。御盛会をおいのりします。

小宮山忠治 (七〇期) 諏訪市

諏訪清陵高校

百周年式典・祝賀会には出席できませんでしたが、十一月二日・六日のOB書作展に参加(出品)させていただきました。百周年の喜びを頂戴致しました。

鹿野(旧姓奥野) 美智子 (七一期)

伊那市 伊那小学校

今年新しい学校に転任し、まだまだ慣れずに忙しい毎日を送っております。

阿部(旧姓青木) こず江 (八〇期)

飯田市

上田高校卒業後、各地を転々とし、飯田に住んで六年経ちました。結婚して子供も三人、毎日が忙しいです。

太田(旧姓北沢) 裕子 (八一期) 岡谷市

今は家事と育児に専念しております。

宮崎達也 (八二期) 松本市 堀金中学校

中信地区中体連野球の専門委員長として、中学生の野球指導、大会運営をやらせていただいております。

お知らせ

宮澤忠明さん(四四期)が

詩集を発刊されました

「思い出・近況」に投稿いただいた宮澤忠明さんが神宮寺賢のペンネームで詩集を発刊されました。

詩集 合歡の花
編集・制作 朝日新聞出版サービス
頒価 一、五〇〇円



学校短信

上田高校にゴルフ同好会ができました。先輩諸氏の不要のクラブ等送りいただければ、幸いです。

有望な生徒も在籍しています。送り先は 左記学校宛。

〒三八六―八七二五

上田市大手一ノ四ノ三二
長野県上田高等学校

ゴルフ同好会顧問 小林俊文先生

文中カット・題字

竹村洋治 氏(五八期)